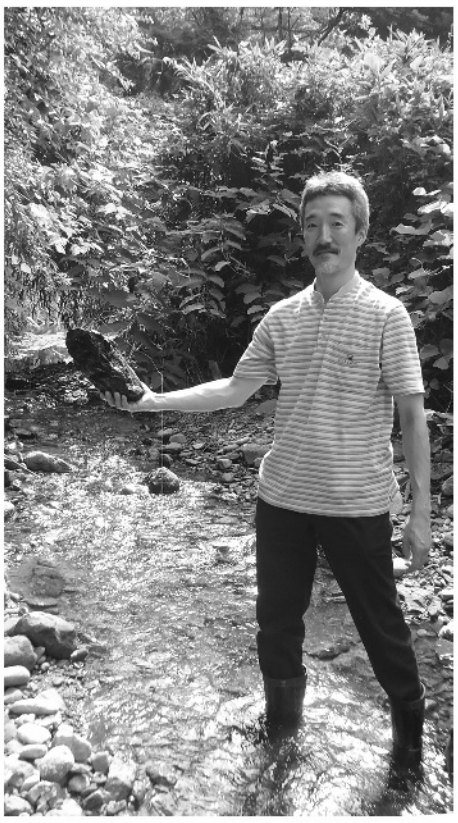
亜炭と埋木　時の人にきく → → → 時の人がきく　リレーインタビュー

昭和の煙の玉手箱「亜炭香古学」の試み

先頃、マチナカアートの参加アーティストの一人、伊達伸明さんが来仙した。関西出身の伊達さんが仙台の「過去の遺物」である亜炭に注目した経緯や、その可能性、アートとの関わりなどについて聞いた。

伊達伸明さん（美術家）

1964年大阪生まれ。京都市立芸術大学美術学部工芸科大学院修了。2000年より建築物ウクレレ化保存計画開始。近年は聞き取り形式の地域活動も各地で展開中。



市内某所で亜炭を拾い上げる伊達さん

―大阪在住ということですが、お名前は仙台ゆかりですね。

親の仕事の都合で私は大阪で生まれ育ちましたが、親戚のほとんどは仙台か東北圏内です。私も子供の頃から夏休みは仙台で過ごしていろんなところに遊びに行きました。市電が走ってた頃もよく覚えてます。親に連れられて乗った時に大声で停留所名を暗唱していたら、運転手さんに正式に車内アナウンスを任されたことがありました（笑）。

―亜炭については以前からご存じでしたか。

数年前、親戚と旧宅の風呂について聞いた時に知りました。その時はあまりヒットしなかったんですが、その後、地質学に関する興味から仙台について調べていたところ、亜炭と埋木に関する記述が目にとまって気になり出したんです。埋木も家にありましたし。

―それがきっかけで今回の参加となった？

いえいえ。その頃は過去の遺物としか思っていなかったですよ。今でも採れるとは思っていなかったので、一度見てみたいと思って八木山の方を眺めていたら、ちょうどその辺を大規模に掘っている人達がいることに気がついたんです。地下鉄東西線の工事ですね。タイムトンネルが開き始めているような気がして、おもしろがり屋のスイッチが入った感があります。

―おもしろい、ですか？

亜炭層が、生活風俗をふくんだ「都市の皮下記憶」として見えてきたんです。普段私は取り壊される建物の部材の一部を取り出して、ウクレレを制作するという活動をしています。長年住んだ建物の表面は、汚れてはいても昔の記憶とつながる生活痕がたくさんあるので、落書きやシールやはがれた塗装などをそのまま残すようにします。切り出しにあたってはそれらをきっかけにして家人の暮らしぶりを直接聞き取るようにしています。小さなカケラが一つあれば、人は多くの記憶風景を引き出すことができるし、それを語ることで自らの前半生を肯定的にとらえたり、次へのステップへと進めたりもします。亜炭について語る親や叔父の顔を見て、これがそんなキーワードになるような気がしたんです。

―語ってくれる人がまだいることは重要ですね。

そのとおりです。直接話を聞けるチャンスは、こちらがその気にならなければ今後そうないかも知れません。今から見れば亜炭は、モノのない時代の効率の悪い急場しのぎの燃料だったわけですが、そんな客観的な価値基準ではなく、郷愁や思い込みや美化や、ときには誤解までも含めながら、個人目線からの証言を集めて当時の暮らしのりんかくを点描したいと思っているんですよ。亜炭はそのためのトリガーです。

―点描というところがおもしろいです。

これは一見民俗学・統計学的な、つまり博物館のような手法にも見えますが、個人史へのかたよりが激しいし、羅列はするけれど結論が出るものでもない。そういう意味でアートというくくりでお願いします（笑）。

―でも香古「学」なんて言っちゃってますが。

言葉遊びは好きなんです。燃焼時のにおいが亜炭の大きな特徴の一つなので、そこを強調したらこんな名前になりました。いにしえを考えるのが考古学なら、いにしえを香って学ぼう、ということです。嗅覚と記憶は脳の同じ部分がつかさどるらしいですし。

―伊達さんは他にも大阪新世界での70店舗インタビューや、横浜のお散歩企画など「聞き取り系」の活動もされていますが、今回のマチナカアートについてはどうとらえておられますか。

作家が土地に入り込んで人や風土と関わりながら作品を作るという美術イベントは、すでにいろんな場所で行なわれています。ですが、別の場所で作ったものを持ち込んで「見に来てくれ」というタイプや、地元の人が人足として参加しただけの協同工作物作りをめざすものが今でも多い。美術っぽい見せ方」がまずあって、そこに土地の個性をすり寄せてていくやり方、ぼく嫌いなんですよ。アートに力があるとするなら、ぼくは求心力よりも界面活性力を信じたいです。アートとしてみられたことのないモノ同士を、切り込んでナンボの人間がおもしろがってくっつけていく、その第三者的な触媒効果こそが、きっと日々を楽しくするタネを生みます。

考えてみれば美術って、対象物と自分とか、過去と未来とか、現実と仮想とか、常に境界面との葛藤を続けてきたわけで、今は今でいろんなところでギシギシした境界面が生まれたりもする。そういういろんな境界を活性化して融合のタネを播くのが美術の仕事なんだろうと思うんですよ。ケタは小さいでしょうけど、軟効性をモットーに時間をかけて聞き取って、接点を探し続けたいところです。

埋木の魅力 ふたたび

亜炭と埋木は兄弟分。同じ層から生まれ、片や人々の心身を暖め、片や工芸品として暮らしを彩った。芸大の漆工科出身の伊達さんは、かねてから会ってみたかったという埋木細工の工人小竹孝さんを訪ね、素材の特徴、作業方法などについて聞いた。

秋保工芸の里・小竹工房で

小竹孝さん（埋木細工 工人）

1944年仙台市生まれ。川内山屋敷で育ち、埋木工人であった父の精緻で暖かみのある作風を受け継ぐ。宮城県芸術芸美術展審査員。昭和61年度宮城県芸術選奨受賞。

―お父様も埋木の職人とうかがいました。

そう、川内の山屋敷にはたくさん埋木細工の職人さんが住んでいて、父はその一人の佐藤さんという人の弟子をしたあと独立して仕事始めたんだよ。三軒長屋でね。そこから10メートルくらいのところに仙台市認可の埋木乾燥施設があって、私はそこで生まれ育ったんだ。大きい埋木は割って炉端の上に持ち上げて乾燥させてたなあ。

―よく遊ぶ少年でしたか。

青葉山でよく遊んだよ。文房具屋さんで買った10円の小刀で篠竹取って笛を作ったり、ススキで弓矢を作ったり、父の眼を盗んで仕事用のノコギリを持ち出して木刀も作った。セミをたくさんつかまえて家に帰ったら「お盆の時ぐらい生き物穫るな」って怒られたこともあったなあ。

―埋木細工はぼくの実家にもいくつかあったので完成品の黒い肌合いは知っているんですが、原木の色はここで初めて見ました。

元はだいたい黒灰色。黒艶は仕上げに拭く漆だね。手ではがれる表面は全部取り除いて加工してくんだ。特別に作った埋もれ木に微粉末を使うこともある。磨いたらきれいな木目が浮かび上がってくるんだけど、なにしろ地面の中に五百万年も埋まってたんだから、木の性はもうないんだ。

―うちに組み物（複数の部品を組み合わせて作るもの）の小箱が一つあります。小竹さんも作られますか。

私は一木作りしかしないんだ。蓋ものの大きな箱でもろくろで挽いたような丸皿でも、全部かたまりからの削り出し。だから手間もかかるし、材料の見極めがとても大事なんだ。箸を一膳作るにしても、なかなかまっすぐな埋木がないからむずかしいんだよ。

―すごい素材だなあ。ますます魅力的に見えてきました。10月14日には亜炭香堂に小竹さんにお招きして、もっとディープな埋木よもやま話をお聞きする予定です。今から楽しみです。

先輩！小学生亜炭しんぶん　三本木の亜炭記念館に展示

マチナカアート開催にあわせて創刊された本紙は期間限定の亜炭新聞だが、大崎市三本木町の亜炭記念館には、地元の小学生達による手作り新聞が展示されており、自由に閲覧できる。亜炭系メディアでは最大手を自負する本紙だが、発祥はこちらの小学生新聞が先、いわば「先輩」にあたる。

「デラックス亜炭タイムス」や「亜炭ザッシ」などタイトルもさまざま。中には茶色のかたまりに顔がついた「亜炭くん」なるキャラまで登場して、ひまわりと亜炭の里・三本木の魅力を紹介する力作も。記念館の最大の目玉である重さ10トンの炭塊の横で、もう一つの主役が読者を待っている。

ATAN KINGをさがせ
ATAN KING
www.atan.jp

SENDAIMEISAN
仙臺名産
埋木細工
黒艶深無限
芳名冠宇宙
堅牢
精巧
鈴木四郎兵店商
三本木町前陸

入場無料・予約不要
9/28 記憶の地層が開かれる

亜炭香堂
展示（9月28日～10月31日の金土日）
1階／暮らしと亜炭
2階／埋木展示
線香作りワークショップ
時間はすべて15時～17時
10月6日(土) 13日(土) 20日(土)
13日 20日は 小竹孝氏のご協力で埋木香台も制作

野中神社
トークイベント
時間はすべて13時～15時
9月30日(日) ほる おはなし
10月 7日(日) あたためる おはなし
10月14日(日) つくる おはなし
10月21日(日) ひろがる おはなし

会場
国分町通　野中神社　サンモール一番町　いろは横丁　亜炭香堂　南町通

問い合わせ先
仙台市市民文化事業団
〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5
仙台市青年文化センター内
TEL: 022-301-7405 FAX: 022-727-1874
http://www.bunka.city.sendai.jp/index.html